

## 米国出張報告－米国の大学関係者の高等教育にかける熱気－

3月9日から15日に米国に出張しました。今回の主な出張目的は日米大学パートナーシップダイアログ、ACE (American Council on Education) 会合への参加また米国の大学関係者と意見交換することです。

皆さんに米国出張の様子と今回の出張で感じたことをお伝えします。

### 1. 日米大学パートナーシップダイアログ

日米大学パートナーシップダイアログはワシントンDCで開催され、日本から12大学、米国から11大学の参加があり、大学以外には日本からは国立大学協会、文部科学省、米国からはACE、学生交流団体等が参加しました。

このダイアログにおいては、学生の流動性について日米間の言語や学事暦の相違点などの課題、学生の教育においてCOIL (Collaborative Online International Learning) の利用、双方の学生が相手国の文化に関心が高いとの指摘があり、特に日本のポップカルチャーであるハローキティやポケモンに米国の学生の関心が高いことなどの意見が交わされました。

ダイアログに引き続き、国立大学協会とACEの間で覚書(MOU)が署名されました。これを機に、今後も継続して国大協とACEが高等教育に関して交流を進めてゆくことが期待されます。



写真1 神山総長補佐とともに



写真2 筑波大学永田学長とともに

### 2. ACE会合

ACEは米国の連邦教育省(1977年設立)よりもはるかに早い1918年に設立され、今年が100周年の記念の年となります。今回の会合では全体会の他、同時並行で分科会がいくつも開催されました。

米国の人口に関する分科会では、米国は元々移民が集まってできた国であり、米国内の地域ごとの移民の増加の様子、人種ごとの移民の増加の現状、人種別出生率の増減、高齢化の進行、女性労働者の増加と男性の失業率の上昇、などについてプレゼンテーションがあり、大学卒の若年層の失業率の増加について指摘されました。

全体会ではキーノートスピーカーから、大学の卒業率の変化（米国では所定の期間に卒業できる学生の割合が低いことが問題になっている）、大学教育の拡大と大学で教育を受ける意義等についてプレゼンテーションがありました。続いて、ACEのメンター賞受賞者が紹介され、最後は学生の音楽パフォーマンスでにぎやかな雰囲気の中、終了しました。

全体として、米国の大学関係者の高等教育にかける熱意が大変高いことが伺え、自律的に教育を発展させてきた大学関係者のエネルギーを強く感じました。



写真3 Ted Mitchell ACE 会長

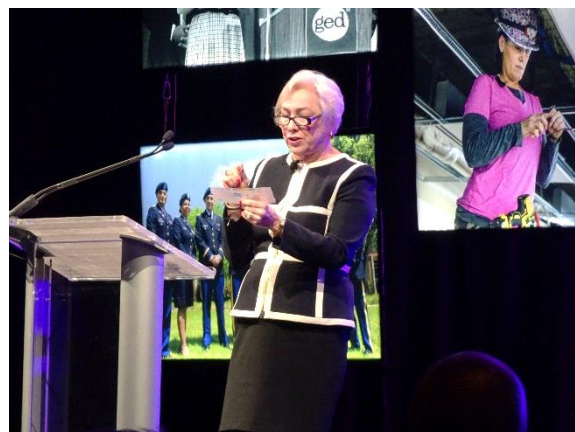


写真4 Nancy Zimpher キーノートスピーカー

### 3. オーリン工科大学訪問

ボストンにあるオーリン工科大学を訪問しました。この大学は2002年に創設された若い大学です。学生数は4学年で330名と規模は小さいですが、工学教育を今までにないやり方で意欲的に進めています。

学生の案内により学内を見学しましたが、各プロジェクトに基づいて工学教育を行っていました。例えば、船を作るプロジェクトでは学生が数学や物理の知識を用いて意欲的にプロジェクトに取り組んでいる様子が伺えました。

大学院は設置されていませんが、卒業生はハーバードやMITなどの超一流大学院への進学者も多く、また、企業からの共創教育の申し込みも多数あり、そのユニークな工学教育は有名で、これまでに国内外から800校以上が見学に訪

れているということです。

学内見学に続き、ミラー学長及びマノー・プロボストと意見交換をしましたが、T字型人間を育てていること、チームにより大学運営をしており、コミュニケーションが重要であること、数学を他の科目に関連づけて統合的に教育していること、教員評価等について意見を聞くことができました。



写真5 学内の視察



写真6 Richard Miller 学長とともに

#### 4. NSF (National Science Foundation)

米国を訪問したので、米国で研究への支援をおこなっているNSFのリヨン部長 (Office of International Science and Engineering, Office of Director) と面会しました。リヨン部長は東京のNSF事務所に勤務した経験があり、日本の学術支援体制等についても精通され、名古屋大学にも訪問したことがあります。

リヨン部長とは、米国内の大学連携の様子、研究への財政支援として日本とNSFとの共同支援、出身国の研究者が米国内の各国のコミュニティと連携している現状、重要な研究課題等について意見交換をしました。

リヨン部長から、「日本の大学は米国の東海岸と西海岸の大学にばかり注目しているが、中西部（いわゆるラストベルトと呼ばれる地域）の大学は、改革に積極的に取り組んでおり多くのイノベーションを生み出している。日本にとっても大いに参考になるので、もっと注目すべきである。その意味で、名古屋大学が早くからこの地域に目を向け、ノースカロライナトライアングルに事務所を構え大学間交流をしているのは素晴らしいことである。」とのコメントがありました。昨年のオハイオ州立大学とのMOU締結も良いタイミングであったと思います。



写真7 Elizabeth Lyons 部長とともに

#### 4. 所感

今回は、ボストンで記録的なブリザードに見舞われる一日、その影響で空港閉鎖となったため予定していたミネアポリス行きが中止になるというハプニングもありましたが、米国の大学関係者の高等教育にかける熱気を肌で感じることができ、日本でも、また、名古屋大学でも、もっと教育そのものについて、喧々諤々の議論が必要ではないかと、感じた次第です。また、連邦教育省が設立されたのは1977年になってからであり、州ごとに教育が行われている中で、全国組織のACEの果たす役割と存在感は極めて重要であるという印象を持ちました。会議では高等教育に関するあらゆる課題が熱心に討議され、また、それを政策に反映させるためのロビー活動が行われており、大学関係者が「自ら高等教育を変えるのだ」という意気込みは大いに見習うべきものがあります。国、文科省の掛け声で全国一斉に動いている日本と比べて、はるかに多様性に富んでいるという印象でした。やはり、世界を自分の目で見てみることは教育にとどまらず、すべての領域で極めて重要であることをあらためて実感した出張でした。